

アメリカ陥落1

異常気象

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

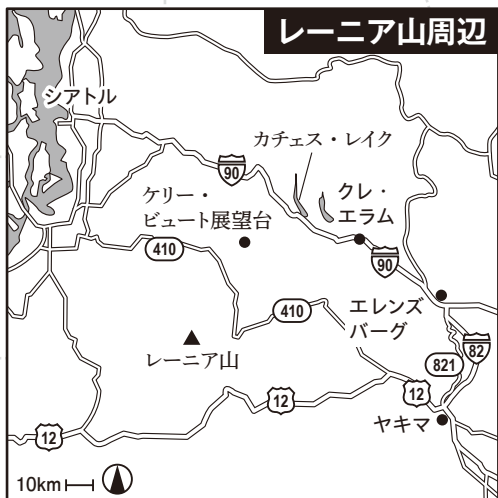
- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
地図
平面惑星
安田忠幸

目次

プロローグ	11
第一章 トルネード	18
第二章 ヤキマ演習場	38
第三章 怪しい影	65
第四章 ヤキマ作戦	91
第五章 大陪審	120
第六章 ダラスの熱い夜	147
第七章 父と娘	176
第八章 崩壊へのカウントダウン	199
エピローグ	216

レーニア山周辺



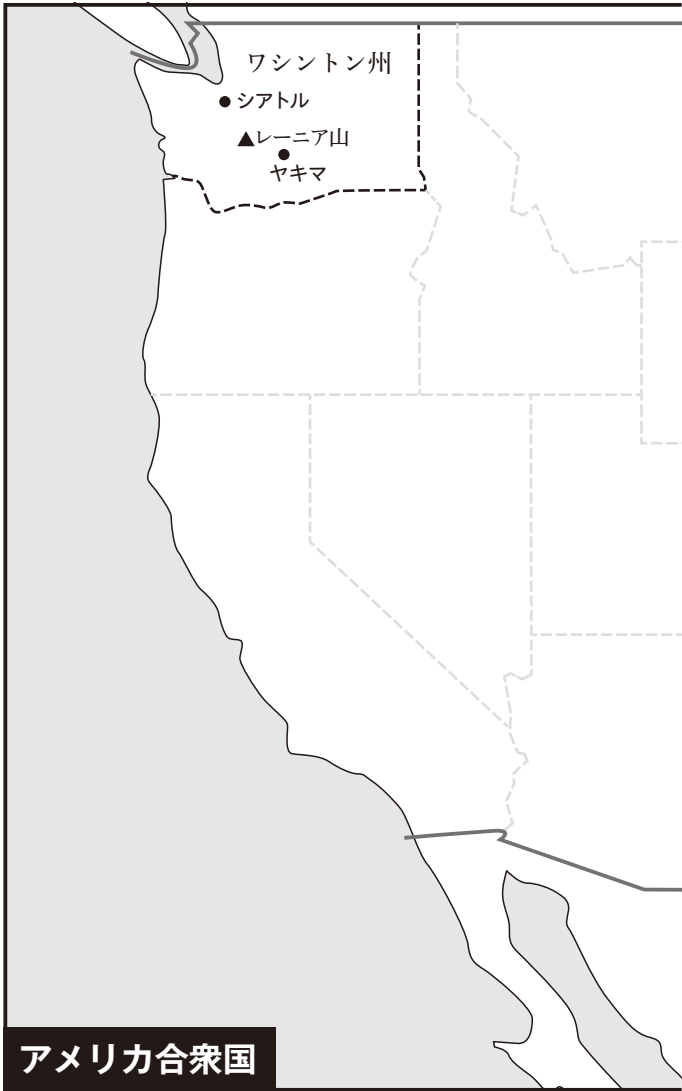
スウィート
ウォーター

ダラス

アビリーン

テキサス州

200km



ワシントン州

● シアトル

▲ レーニア山

● ヤキマ

アメリカ合衆国

登場人物紹介

//// [日本] //////////////////////////////////////

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

土門康平^{どもんこうへい} 陸将補。水陸機動団長。

〈原田小隊〉

原田拓海^{はら たくみ} 三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。

待田晴郎^{まちだ はるお} 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

〈姜小隊〉

姜彩夏^{かんあや か} 二佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。

福留弾^{ふくとめだん} 一曹。分隊長。コードネーム：チェスト。

姉小路実篤^{あねこうじ きぬあつ} 二曹。父親はロシア関係のビジネス界の巨物。コードネーム：ボーンズ。

〈訓練小隊〉

峰沙也加^{みね さやか} 三曹。山登りとトライアスロンが特技。コードネーム：ケーター。

瀬島果耶^{せじま かや} 士長。“本業”はコスプレイヤー。コードネーム：アーチ。

《水陸機動団》

司馬光^{しば ひかる} 一佐。水機団格闘技教官。

〈第3水陸機動連隊〉

後藤正典^{ごとうまさのり} 一佐。連隊長。準備室長。

権田洋二^{ごん だ ようじ} 二佐。準備室幕僚。

鮫島拓郎^{さめじまたくろう} 二佐。第一中隊長。

榊真之介^{さかきしんのすけ} 一尉。第二小隊長。

工藤真造^{くどうしんぞう} 曹長。小隊ナンバー2。

////【アメリカ】////

●エネルギー省

ソーサラー・ヴァイオレット 通称M・A。Qクリアランスの持ち主。
サイモン・ディアス 博士。技術主任。
バンディッツ システムエンジニア。

●^{N S A}国家安全保障局

エドガー・アリムラ 陸軍大将。長官。

●在シアトル日本総領事館

いちじょうさねみ
一条実弥 総領事。
どもんえりこ
土門恵理子 二等書記官。

●空軍

トミー・マックスウェル 空軍大佐。調整官。M・Aとは旧知。
テリー・バスケス 空軍中佐。ドゥームズデイ・プレーン “イカロス”
指揮。

●海軍

レベッカ・カーソン 海軍少佐。M・Aの秘書。

●ワシントン州陸軍州兵

カルロス・コスポーザ 陸軍少佐。消防局の放火捜査官。
マイキー・ベローチェ 少佐。退役陸軍少佐。

●FBI

ニック・ジャレット 捜査官（シアトル州）。行動分析課のベテラン。
ルーシー・チャン 捜査官（シアトル州）。行動分析課。
ナンシー・パラトク 捜査官（ワシントン州）。イヌイット族。

●郡警察（テキサス州ノーラン郡）

ヘンリー・アライ 巡査部長。アビリーン在住。
オリバー・ハッカネン 検視医。一度引退し、今はパートタイマー。

トシロー・アライ 元警部。ヘンリーの父親。RHK事件に気付いた最初の警察官。

ベンジャミン・クラーク 元刑事部長。ホワイトカラー犯罪専門の捜査官。

●CAP

ジェシカ・R・バラード 元空軍大尉。“ツイン・オッター”のパイロット。

●その他

カール・F・リヒター テキサス州知事。

にしやまじょういち
西山 穰一 ジョーイ・西山。テキサス州スウィート・ウォーターでスシ・レストランを経営。

ソユン・キム 穰一の妻。在日韓国人だったが、現在はアメリカ国籍。

ちよまる
千代丸 穰一とソユンの息子。

//// [ロシア] ////

●民間軍事会社 “ヴォストーク”

ゲンナジー・キリレンコ 大尉。

ワシリー・ドミトフ 軍曹。

アレクサンダー・オレグ 伍長。

//// [中国] ////

●海軍

リンカンキアン
林剛 強 海軍中佐。ステルス艦上戦闘機 J-35 (殲 35) 編隊長。

タオホン
陶紅 大尉。部隊で一番若く、紅一点。

アメリカ陥落1 異常気象

プロローグ

テキサス州ダラスから、20号線をひたすら西へ走って三五〇キロに位置するスウィートウォーターは、人口一万の小さな町だった。

特に何かがある街ではない。何もない街だった。良い風が吹くので、街を出るとあちこちに風力発電施設が建っている。テキサスは石油の街だと思われがちだが、その数は今やカリフォルニア州より多かった。ここではまだ白人が多数派だが、続いてヒスパニック系が多く、黒人は少ない。アジア系となると、まず街ですれ違うことはない。

街の東外れにあるヒルサイド・ストリートは、実際には丘ではない。ここは三六〇度、どこまで

行っても、地平線の彼方まで、のっぺりとした、平らな街だった。

家並みはほとんどが平屋構造で、ガレージを兼ねた庭があるが、あまりに気温が高く、水も貴重なので、手入れが行き届いた庭と呼べるようなものも無い。ただ戸建ての家が、芝生もない庭にポツンポツンと建っている、そんな感じだった。

一戸一戸の庭は広いが、そこに何かがあるわけではなかった。せいぜい、竜巻用の避難シェルターが掘ってある程度だ。

ジョーイ・西山にしやまこと西山穰じょういち一がようやく手にした念願のマイホームも、そんな家だった。隣家

との間には垣根も境界線も無い。それがこの街のあり方だ。

日影を確保するために、家の南側にテキサス州の州木であるペカンの苗木を三本植えた。成長すれば、ナッツが収穫できる。だが、隣近所からは笑われた。ペカンは風ですぐ倒れる。ハリケーン銀座のここテキサスでは、ひと夏越せないだろうということだった。

この街にも街路樹はあるが、新興住民であつても、庭に木を植えている住民はまずいない。家庭菜園すらないのは、そういう自然環境の厳しさが理由らしかった。

内陸部のここでは、夏は平均気温が摂氏四〇度、華氏一〇〇度にも達する。西山が渡米してまっさきに覚えた英単語が、華氏を意味するファーレンハイトだった。

通りに出て北の空を見上げると、どす黒い、蛇

のような黒い雲が空へと伸びている。二本あつた。一本はかなり遠いが、手前の一本は近い。

気圧差が生じるせいで、この辺りも一気に風が強くなった。埃が舞い、それがほぼ水平に地面を流れていく。西山は、子供が飛ばされないよう、しっかりと抱きしめた。

「千代丸ちよまる、よく見ろ！ スゲエーなあれ。たぶん、Fスケールで言えば、確実にF3は行っているぞ。Fスケールってのは、日本人の学者の苗字から取られた。日本は今ほ落ちぶれて、経済ズンドコ、ジジババが現役世代を搾取しまくり、やる気のある連中はみんな国を捨てて逃げ出したが、お前が大きくなる頃には、復活しているかもしれん。その頃、お前はドルの札束を抱えて日本に凱旋するんだぞ。だから、日本語もちゃんと覚えるんだ」
シエルトアのハッチが持ち上がり、「何やつてんのよ！ あんた！——」と妻が英語で怒鳴った。

「勿体無いな。ライブカムでも置いとけば良かった。そうだ……。車のドライブ・レコーダーを動かすとけば良いか！」

西山は、妻のソユンに息子を預けると、「ちょっと車のレコーダーを動かしてくる」といったんガレージに入った。

「ゴー！」という地鳴りのようなうなり声が近付いてくる。フォードのエクスポローラーのエンジンが掛け、路上に出した。ドライブ・レコーダーが動いていることを確かめてから外に出た時には、もう眼を開けているのも大変な暴風が吹いていた。シエルターのハッチの隙間から妻が睨み付けていた。

「車に傷が付いたらどうすんのよ！」

「その程度で済めば、動画の収益で修理代くらい出るさ」

ほんの三畳程度の広さしかない、普段は物置と

して使っているシエルターに降りる。中は蒸し風呂で、床には微かに水たまりもあった。

LEDランプ一個だけの灯りしかない。棚には、シエルターに閉じ込められた時に助けを呼ぶためのホイッスルや水のタンク、ハッチを持ち上げるためのボールや、乾電池やラジオも常備してあった。

気圧がどんどん下がり、耳鳴りがしてくる。ハッチを締めたが、その気圧差のせいで、持ち上がりそうになる。内側にチェーンが付いていたので、西山は右腕を絡めてハッチを抑えた。

「ちょっとこれ、直撃じゃないの！」

「そうかもな。このハッチ、内側から止められるようノッチがどこかにあっただろう？ ライトで照らしてくれ」

このシエルターにもライトはあったが、すでに停電していた。比較的電力が安定しているテキサ

スでも、郡部では、停電は珍しいことではない。レストランを開業する時も、それが一番の悩みの種になった。

これがダラスなら、ビルごと自家発電装置があったりするが、こんな郡部ではそうもいかない。自家発電装置の導入も考えたが、運転時の騒音が許容範囲外だった。結局、中古の無停電電源装置を購入し、営業している数時間分稼げれば良いと判断した。今は、屋上に太陽光パネルも置いて、昼間は売電もしている。もう少し投資すれば、電源は全て自家発電で賄えそうだった。

「あつた！ これだ——」

二箇所のロックを掛けると、ようやくハッチの振動が止まった。轟音はますます大きくなり、地鳴りと、振動も伝わってくる。まるで地震みたいだ。

「こつちに来るぞ……」

「地震じゃないの？……」

息子が母親にしがみついてくる。

「このシェルター、持つんだろうな……」

ゴゴーツ！ という音が続き、やがて会話もまならない音になり、大小様々な衝撃音が響いてくる。それは地面を伝わってきた。何か巨大な物体が、ある時は地面を転がり、ある時は、空から降ってきている感じだった。まるで巨大な戦車が向かってくるようだった。

衝撃音がする度に、子供が縮み上がる。最後には、父親が妻と息子の上に覆い被さって、その長い時間を耐え抜いた。

五分は続いたような気がしたが、実際は、二分かそこいらだった。衝撃が収まり、しばらく三人で顔を見合わせた後、父親はハッチ部分のロックを外して、恐る恐る、ハッチを持ち上げて見た。まだ強い風が吹いていた。視界はほとんどない。

いったんハッチを締めて、しばらく待った。すると、車のクラクションが聞こえてきた。それも一台や二台ではない。周辺の自家用車の盗難防止装置が一斉に作動しているのだ。

父親は、意を決して再びハッチを開け、地上へと出た。景色が一変していた。さつきまで、ここにあったものはもうなかった。路上に、どこかの戸建ての屋根が鎮座している。半分だけ引きちぎられた屋根が転がっていた。

誰かのピックアップ・トラックがひっくり返って転がっている。クラクションが鳴り、ハザードランプが点滅していた。道路を挟んだ真向かいの家には、風力発電の巨大な羽が刺さっていた。

そして、自分の家はなかった――。

壁が一部残っている。だが屋根はなかった。柱がむき出しになり、一ヶ月悩んで買ったお気に入りソファが、めくれたガレージの屋根に刺さっ

ていた。自分のエクスポローラーは、どこにもなかった。もちろん、植えたばかりのペカンの木もどこかに吹き飛ばされていた。

ガレージを覗くと、妻のヒュンダイは無事な様子だった。だが、路上がこの状態では、今日いっぱい、車は出せそうになかった。スマホを手にしてみたが、旗は立っていない。携帯の基地局もやられたらしかった。

店のことが心配だが、竜巻はここからすぐ街の外へと向かったみたいだった。まずは無事だろう。何から手を付ければ良いだろうと思った。ご近所さんの無事を確認し、割れたガラスや瓦礫は危険なので、片付けを始める前に子供をどこかに預けるなりする必要がある。それが無理なら、エアコンを付けたヒュンダイの中でシートベルトを締めておくしかない。

ソユンは、固い表情のまま、黙々と作業を始め

た。ヒュンダイをガレージから出し、エンジンを掛けてエアコンを入れ、息子を後部座席に座らせた。

「ご近所さんらが、互いの無事を確かめ合っている。夕刻の時間帯。店は夜の開店準備を始める時間帯だったが、バイトとも連絡の取りようが無かった。」

もし、街全体が停電しているようなら、今夜の営業は諦めるしかない。

処分する瓦礫の山をどこかに作らなきゃならぬ。無事だった家具や家電製品もあるだろうが、そんなものを回収してどうなるのだろうかと思つた。持つていく別の家があるわけじゃない。

「軍手が欲しいな……」

妻が、ついに耐えきれなくなつて泣いていた。

ジョーイは、肩を抱いてやるしかなかった。

「家なんて、また買えば良いじゃないか？」

「ローン、始めたばかりよ？」

「自己破産だつて出来る。保険が効くかどうか怪しいけど、何かの救済措置もあるだろう。借金を踏み倒して日本に逃げ帰るって手もあるし」

キッチンの水道管が折れたか外れたかして、水が勢いよく噴出している。元栓を締めなければと、ソユンがキッチンというか、キッチンがあつた辺りに近付くと、何かのマネキン人形が座つていた。彼女は、それをマネキンだと思つたし、どこか他所から飛んで来て、そこに偶然鎮座したのでらうと思つた。

「こんなもの、どこから飛んで来たのかしら……」

しばらく凝視すると、そのマネキンには、かつらが被せてあつた。たぶん金髪の頭だ。そして、マネキンと決定的に違う所があつた。歯があつた。唇は剥げ、むき出しの歯が上下覗いている。

ソユンは、ほんやりと、これはマネキンじゃない、マネキンじゃないとすると……。

その数秒後、彼女は、ギャー！——、と大声を上げてその場から逃げ出した。

第一章 トルネード

ジョーイは、携帯の旗が立つ所まで出たものの、911は全く繋がらなかった。だが、レストランに出ているはずの板前の一人とは繋がった。幸い店があるエリアは被害はないが、停電しているとのことだった。無停電電源装置がすでに始動して冷蔵庫は動いている。営業しなければ、明日いっぱい電力は持つかもしれないとのことだった。

これで一安心だ。

結局、路上を自転車で移動していた制服警官の一人を捕まえて、崩壊した自宅から死体が出てきたことを、ジョーイは身振り手振りで伝えた。英語はまだまいちだ。会話だけで完璧に伝えるこ

とは出来なかった。そもそも、死体って何だ？
デッド・ボディで良いのか？

制服警官が自宅跡に現れた時には、もう辺りはすっかり暗くなっていた。避難先を指示する郡の広報が回っていたが、まだ皆、車のヘッドライトを使って片付けに追われていた。

西山家でも、ヒュンダイのヘッドライトを頼りに、貴重品の持ち出しが続いていた。

郡警察から、私服の刑事が電動キックボードでようやく現れたのは、二一時を回ってからだだった。三〇歳前後に見えるヘンリー・アライ巡査部長は、ヘッドランプを頭に付けていた。旦那が、英

語がまだ不自由だと悟ると、もっぱら奥方にイン
タビユールした。

「こんな所に、日本人がいるなんて珍しいです
ね？」

「刑事さんも、南部訛りがありませんね？」

「私は、もとはロスアンゼルス育ちなので。二〇
年前、家族でこっちに引越して来ました。ニシ
ヤマさんは、最近こちらに？」

「私は、ニシヤマ姓でなく、キムです。ソユン・
キム。在日韓国人という存在をご存じですか？」

「ああ、知ってますよ。何か、難しいというか、
日本で、いろいろ差別されている人々ですよね」

「私は、ハイスクールに上がった頃、日本の不景
気に見切りを付けた親と一緒に、ダラスにいた親
族を頼って渡米しました。グリーンカード枠を使
ってね。国籍はもうアメリカです。旦那はしばら
く時間が掛かるでしょうね。ウォルマート近くの

スシ・レストランを経営しています」

「あそこね！ 流行ってますよね。いやちょっと
お高いみたいだから、入ったことはないけれど」

「夜はそれなりだけど、ランチは安いですよ。ご
招待します。ぜひ御家族でいらして下さい」

「ええ。その内に……」

「竜巻被害、酷いんですか？」

「郡当局は慌てているみたいですね。たぶん百戸
以上の住宅が全壊同様の被害を受けた。死者はま
だ確認されていませんが、これで確実に人口も税
収も落ちるでしょう。いつ、ご自宅の購入を？」

「去年です。開店準備していたらコロナが始まっ
て、何もかも計画が狂って、まだローンは丸々九
割は残っているんです。でもジョーイは、いつも
樂觀主義者だから……」

「それは良い旦那さんだ……」

アライ刑事は、スマホで住宅の全景を撮影し、

旦那にマグライトを持ってもらい、キッチンがあった辺りの写真を撮った。ホラーな光景だった。倒壊した住宅の中に、ミイラ化した遺体が鎮座しているのだ。どうして鎮座しているのかはまだわからない。だが上半身が起きた姿勢だということだけはわかる。

あまり近寄りたくなかったが、それが仕事だ。二メートルほどの距離から、スマホのフラッシュも使って、記録用の写真を撮っていく。

人口一万の街の小さな郡警察署の手には負えない。隣近所に応援要請は出している。東隣のアビリンから、鑑識や検死医が駆けつけてくれるはずだった。それで足りなければ、ダラスから呼ぶことになるが、それは明日、陽が昇ってからになるだろう。

撮影作業が終わると、いったん瓦礫の山から離れて下がった。

「携帯、いつ復旧するか、ご存じないですか？」

「今夜中は無理でしょうね。あちこちで同時多発に起きた竜巻だったみたいで、うちより被害が大きい街もあります。避難所へ行った方が良いでしょう。こは小さな街だし、警察と消防が夜通しパトロールしますから、略奪は起きないでしょう」

「旦那が気にしているのですが、私たち、容疑者か何かになるんですか？」

「いえ。あの遺体は、他所から飛ばされてきたものではなく、この家のどこかに埋まっていたものでしょう。死後、数年は経っているからお二人は関係無い。売主の情報はお持ちですか？」

「いいえ。事情は聞いてますけれど。リフォームを始めた途端にコロナが始まって、それで資金繰りが立ちゆかなくなって、手放すことにしたと。」

「だから、相場よりだいぶ安く買えたんです」

「どうしてまたこんな辺鄙な所に？ アビリン



からだって通勤できるでしょう。一時間掛からない」

「あそこは、空港もあれば空軍基地もある。不動産価格もそれなりですよ。子供の教育を考えるようになったら、ああいう大きな街の方が良いでしょうけれど」

「それは言えますね。旦那さん、本当に英語はダメなんですか？」

「お店では、頑張つて喋るんですよ。でもプライベートになると引つ込み思案で。子供の前でも、日本語は止めろと言っているんですけどね。あの遺体、いつ頃持つていってもらえますか？」

「検死医が到着すれば、すぐ移動出来ます。暗いから、鑑識作業は、今夜は現場保存程度で明日の朝から本格化するでしょう」

ようやくシヨベルカーが現れて、路上の物体を撤去し始めた。結局エキスプローラーは、一〇〇

メートル先の民家の壁際で見つかった。ルーフが潰れていたので、廃車は避けられそうになかったし、肝心のドライブ・レコーダーも、徐々に視界が奪われていく様子を撮影録画しただけで、売り物にはなりそうになかった。

ひとまず路上のゴミが撤去されると、母親と息子は、ヒュンダイに乗り、ようやく避難所へと移動して行った。

父親と二人残され、アライ刑事は、微かに知っている日本語のワードを交えながら意思疎通を取ろうと努めた。奥方が言うほど彼の語学力は酷くはない。

日本では一〇年、ホワイトカラーな仕事に就き、給料が上がないことに絶望して、こっちでスシ職人として働き始め、貯金もして、ようやく自分の店を持てるとなった途端に、コロナで酷い目に遭ったとのことだった。

なぜこんな辺鄙な郡部で？ と聞いたら、店が評判になれば、近隣の大きな街からでも車を飛ばして来てくれる。アメリカ人はドライブが好きだ。距離は問題じゃないとの話だった。不動産が安い分、それだけランニング・コストを抑えられると。

二三時、ようやくアビリーンからの応援部隊が到着した。検死医に鑑識。検死医のオリバー・ハツカネンは、アライが良く知っている人物だった。「ヘンリー、元気だったか？ 親父はどうしてる？」

「ええ。父を呼ぼうかどうか迷ったのですが、まずは貴方に見てもらおうべきだと思います」

「私だって、もう引退した身だぞ？ 今はパートタイマーだ」

「でも、呼ばなかったとなると、あとで文句を言われることはわかっていたので」

ハツカネン医師は、鑑識にしばらく待つよう命じてから、ヘッドランプを装着し、アライ刑事の後に続いて、キツチン跡に上がった。

半分ミイラ化している死体にヘッドランプの光を当てると、「なんてこった！……」とハツカネンは呻いた。

「こいつは、RHK、リフォーム・ハウス・キラードぞ……」

「間違い無いですか？」

「親父さんから話を聞いたことは？ 捜査資料と見たことはなかったのか？」

「いえ。事件のアウトライン程度なら聞きました」

「工業用のビニール袋だ。それで遺体を包んでいる。昔はどこでも買えるものじゃなかった。たぶん今は、アマゾンとかでも買えるだろうが。ここを見る……」

首から下は、厚手のビニール袋に包まれている。死後硬直したままビニール袋に包まれただろう。箇所をライトを当てた。

「メディアには一切公開されていない情報だ。犯人のサインというか、プロファイルで、署名的行動」と呼ばれる類いのものだ。両手の指先を伸ばした状態で、お祈りのポーズを取らせて手首を縛る。この縛り方の癖も、間違い無くRHKだ。FBIが、百人掛かりで乗り込んでくるぞ。ここはお祭りみたいに賑やかになって、ポップコーン売りのワゴンが出るな。ホットドッグ屋も。君ら、仮設トイレも準備した方が良くもしれん……。被害者は白人女性、恐らく二〇歳代……。身長は、やはり小柄だな。一六〇センチを僅かに超えるくらいだ。死後五年前後だろう。失踪者データベースにDNAがあれば良いが……。埋め込まれていたのはどこ？」

アライは、ヘッドランプの光を当てた。

「たぶん、この辺りですね。煉瓦の壁があった所です。ここだけ、後からリフォームで増築したように見えますから。犯人はどうして新築中ではなく、リフォーム中の住宅を狙うんですか？」

「これと言った理由はなかったように思うけどな。取えてハードルが高い作業に挑んでスリルを味わっているんじゃないか？ とかその程度の分析だったように思う」

二人はいったんその場から立ち去ると、鑑識が立ち入り禁止の黄色いテープを張り始めた。今夜はもう遅いし暗いので、遺体搬出と現場保存だけして、鑑識作業は明日の朝から始めることになった。

その日、テキサス州に隣接する各州を含めて、Fスケール4から5の巨大竜巻一五個が発生し、うち七つもが住宅街を直撃、街を潰滅させて横断

した。何千戸もの家屋が倒壊し、五〇人を超える死者を出し、全米でも記録に残る竜巻被害となった。ここスウィートウォーターの破壊は、他所の被害に比べれば、まだまだしな方だった。

明けて翌日、早朝からの鑑識作業の開始を見届けると、アライはいったんアビリーンの自宅へと戻った。父親はすでに起きていたが、ややこしい話をする気にもなれず、RHKの話は出さないまま寝た。

昼頃、署からの電話で起こされた。FBIが向かっているそうなので、空港で出迎えて現場にご案内しろ、とのことだった。郡警察署は小さいから、もし部屋が必要なら、アビリーン警察の協力を仰げとも。

街の南東外れにあるアビリーン空港で待っていると、FBIは専用機ではなく、ダラスからの小型のコミュニター定期便に乗ってやってきた。

それも二人ではなく、小柄な東洋人女性一人だけだった。ルーシー・チャン捜査官は、年の頃に於いて、大学出たてという感じだった。

アライは愛車のホンダ・オデッセイの後部座席に彼女を乗せると、まずエアコンをギンギンに掛けて、車内が冷えるのを待った。

「暑いですね。何というか、テキサスは異質な暑さだわ」

「南部は初めてですか？ フロリダ辺りとは少し違う暑さでしょうね。でもDCのオレンジ色の空よりはましでしょう？」

「それは言えている。あっちは、臭いもあるし、明らかに健康を害する煤煙だから。毎日、眼が覚めて朝食を済ませ、外に出た途端、憂鬱になるわ。また今日もこの空かと」

「行動分析課なんて本当にあつたんだ？ でも、皆さんは、ガルフストリームの専用機で移動する

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。